

## 保育のための“遊び”研究考(XI)

再び「はないちもんめ」について(下)

大森 隆子

### 序

前前稿<sup>1)</sup>においては1960年代の、又、前稿<sup>2)</sup>においては1970年代以降の「はないちもんめ」に関する研究書の中から、わらべうた全体の構想に関わらせて言及している論考に的を絞って取り上げた。本稿においては、まず、当論考の始発点である本田和子氏の「「花一匁」考 子どもたちの歌垣」を紹介し、併せて何点かの関連する論説に触れておきたい( )。次に、伝承されてきた具体的な遊び例の集約を行い、詞句や遊び方等の面から検討を加える( )。これらが、論として形成されてきた「はないちもんめ」像に何らかの具体性のある根拠を与えることになればありがたい。それらを通して、保育のための遊び研究に資する幾許かの提言が得られればと思う(結び)。

### 「はないちもんめ」論

#### 1 本田和子「「花一匁」考 子どもたちの歌垣」<sup>3)</sup>

氏は、草稿にあたり文献的な記録を渉獵

しておられる。その結果、鬼ごっこやかくれんぼうなどの伝承遊びが江戸時代の後期資料に少なからず残されているのに比して、この「はないちもんめ」は当時の資料に全く姿をみせないこと、ようやく大正の後期ないし昭和の初めに至って見受けられることを確認されている。それをもってこの遊びは、定説である「大正期以降の比較的新しい遊び」<sup>4)</sup>との見解にたたれる。しかし従前の研究者がここで袋小路に入り込んでしまったのに対して、氏は西郷信綱の「市と歌垣」<sup>5)</sup>に着想を得、極めて斬新な手法を用いてこの遊びのルーツ解明への光明を見出された。

それは、文献上に記録された史実としての遊びの姿を、具体的には 詞句 ルール 形態 といった遊びの構成要素の側面から、その発祥もしくは時空間による変化や違いを丁寧に辿っていく方法によって解き明かすのでなく、有機体としての遊びの存在(ご自身の体験が大きく介在する)に着眼し、遊びを組織する要因を抽出し、それらと同型性を有する行為(遊びの範疇に拘束されず)に視界を拓くことで、既成の觀念

1) 『豊橋創造大学短期大学部研究紀要』第14号,1997年。

2) 同上,第15号,1998年。

3) 本田和子「「花一匁」子どもたちの「歌垣」」(『現代思想』2,青土社,1983年所収)

4) 同上,p.149。

5) 西郷信綱「市と歌垣」(『文学』4,岩波書店,1980年所収)

や時空間の制約を越えた新しい見解を供されたのである。

まず、「はないちもんめ」遊びから特徴的な組成要因として、かけ合い、指名、交換の3つを選び出す。そしてそれらが奇しくも古代の歌垣<sup>6)</sup>と要因において一致することを指摘する。さらに「二組の異集団として対立した子どもたちが、歌をかけ合い、足を踏み鳴らして闘う」様が歌垣の様態とだぶることも明らかにする。こうしたことから、古代の民俗行為である歌垣と遊び「はないちもんめ」の間には何らかの同属性のあることを、西郷が「市」と「歌垣」の間に記号論的な同類性を認めたと同様の手法で確認されたのである。

しかし氏は、その同属性が直接的な関係からもたらされたものとは考えていない。「子どもが歌垣の模倣をしたとか、誰かが変形して伝えたというような、直接的な継承ではない。歌垣において、異種族間で歌をやりとりし、人やものを交換し、共に踊り廻った生のエネルギーの奔騰、そしてコミュニケーションへの希求、それが、子どもたちの場合、こうして同型性を持った遊びという表現で、極く最近まで生き延びていた、ということなのだ<sup>7)</sup>と遊びの本質を透徹する眼差しのレベルで押さえている。

一方で氏は、文献上の記録から推察して、「はないちもんめ」の原型としては「子捕る子捕る」系と「子買い」系の二種の遊びが考えられると名指ししている。「子捕る子捕る」系の遊びには、鬼=異人によって力づくで子を奪い去られることもあった中世の社会的背景が、「子買い」系遊びには、近世の「人身売買」という一種の商取り引きが見え隠れするという。

ただし、氏が「はないちもんめ」の遊びから直接的に感受する幻影は、上述の二種の遊びや背後にある社会的情景を超えて「古代の「市」において、大勢の男女が人垣を作り、足を踏み鳴らしつつ踊り歌ったという「歌垣」に立ち返るようだ。

## 2 西村清和「交換と交歓 花いちもんめ」<sup>8)</sup>

「遊び」を現象学の立場から考察した優れた論考『遊びの現象学』中に、表題の一節がある。遊びを表象的に切り取る氏の切り口の一つに「愛」を設定しているが、その説の展開は西郷信綱の「市と歌垣」を踏まえたものである。「愛が、人間のもっとも根本的な企てであるところから、他のどんな遊びにもまして、愛の遊び、つまりは、愛という局面にたまさか現象する遊びの様相は、つ

6) 「古代、男女が山や市などに集まって飲食や舞踏をしたり、掛け合いで歌を歌ったりして性的解放を行ったもの。元来、農耕予祝儀礼の一環で、求婚の場の一つでもあった。かがい。(のちにが宮廷など貴族にとり入れられて)一群の男女が相唱和する、一種の風流遊芸。(林大監修『言泉』小学館、1986年)

西郷は、共同体の農耕儀礼の一つとみる従来の見解に対し、市との相関関係に焦点を絞って歌垣の本質について解明を試みる。歌垣という語は「歌懸き」、すなわち歌をかけあうにもとづくことされる。多数の男女が集まり舞踏しつつ歌をかけた行為で、それがなされたのは村内ではなく村村を結ぶ市においてであったと立証する。そうであれば、見知らぬ者たちがつどう場であったわけで、「探りを入れたり、いなしたり、はぐらかしたり、もどいたりの要素が多い。演技や思惑も加味されてきている」という男女の恋の贈答歌にありがちな傾向にも納得がゆく。またこうしたかけひき、警戒や競争、友情や対立といった事象に、市の取引と歌垣の有り様との記号論的な同類性が存すると述べている。

7) 前掲「花一刃」子どもたちの「歌垣」p.154.

8) 西村清和『遊びの現象学』勁草書房、1989年。

ねに企てと、微妙であやうい境界で接する。ここに、従来の多くの遊び論、とりわけ遊びの文化論がおかした、「愛の遊び」にかかわる誤解も由来する。それらが愛の戯れとして一括してきた現象の多くは、むしろ愛の企てであり、そこには混同がある<sup>9)</sup>と、氏は反道徳的な戯れごととして括られてきた「愛の遊び」の中に、真剣で誠実な「愛の企て」を跡付けていこうとする。「古代の「歌垣」、東国では「歌(かがい)」と呼ばれた、こんにちでもあまりよくわかっていない行動は、一般には、種まきや収穫時に、神に祭り飲食して、男女が舞い歌をかけあう、豊作予祝の農耕儀礼と考えられ、ここでは、日常生活の枠のそと、ハレの場での性の自由な解放があったとも推測されている。この通説に対して、西郷信綱は、歌垣を「市」との関連でとらえなおそうとする」としたうえで、その共通項を二点指摘する。一つは共同体の枠を越えて行為が行われること、二つは「探りを入れたり、いなしたり、はぐらかしたり、もどいたり」という心理的やりとりの要素がみられることである。片や経済行為をさし、片や民俗行為であるが、双方とも社会的交換の様式である。

こうした市の交易関係や歌垣の相互交換性に潜む主要因と、童子の遊びである「花一匁」の要因が同型性をもつことを指摘したのが本田和子であるという。すなわち、前者における 応答、解の宙づり、役割交替 と後者における かけあい、指名、交換 という要素項目が重複するという事実において、本田氏は、このことをもって大人社会の現象と子どもの遊びとの同類性を示唆

する。しかし西村氏は、「交換と相互性が、ひととひと、神とひととのあいだの、つまりは社会空間のもっとも根本的な構成原理であり、コミュニケーションの基本骨格だからこそ、鬼ごっこやかくれんぼ、子買いや花いちもんめといった遊びもまた、現実の社会における、ひととひととのあいだの一関係、コミュニケーションの一形式として、交換と相互性においてなりたつ。だが、これらの遊びが、本来の市の交易や求愛行動のような、企ての対向に立つのではなく、追いつ追われつ、とったりとられたりする遊動の同調に立つ以上、遊戯関係を構成している交換と相互性の構造は、遊びに独自のものであるといわねばならない<sup>10)</sup>」と要因の同型性から関係の構築を構想する本田見解に対し、市や求愛行動が過程においてはともかくも、結果において遊動の不同調に立つことは、遊動の同調を前提に構成される遊びとは根本的に構造を異にする、いわば異次元に存在する別個のものとの考えを示す。

## 「はないちもんめ」例の集約

大正末から昭和期にかけて日本各地で遊ばれていた「はないちもんめ」を、これまでと同様『日本わらべ歌全集』全27巻<sup>11)</sup>に収録された事例に求め、全編から抽出された78例をもとに、その分布状況、詞句、旋律、遊び方の面からまとめてみた。

### 1 分布について

北海道から鹿児島に至る35都道府県にわ

9) 同上p 122.

10) 同上p 132.

11) 浅野建二・平井康三郎・後藤一監修『日本わらべ歌全集』柳原書店。

たって、78例の「はないちもんめ」<sup>12)</sup>が記録されていた。その採集地の分布状況は表1の通りである。

これをみると、採集されなかったのは秋田、宮城、千葉、神奈川、三重、広島、島根、鳥取、山口、佐賀、沖縄の11県で、採集例は日本列島の東半分には46例、西は32例と中部以東にやや多く見られた。

表1 「はないちもんめ」の分布地

都道府県名		例数	都道府県名		例数
東 46	北海道	1	西 32	京 都	1
	青 森	4		大 阪	2
	岩 手	2		兵 庫	2
	山 形	4		奈 良	1
	福 島	5		和歌山	1
	東 京	3		三 重	2
	埼 玉	2		岡 山	3
	群 馬	1		島 根	3
	栃 木	3		徳 島	2
	茨 城	3		香 川	2
	愛 知	2		愛 媛	1
	岐 阜	2		高 知	1
	静 岡	2		福 岡	5
	山 梨	3		長 崎	1
	長 野	3		大 分	1
	新 潟	1		熊 本	2
	富 山	2		鹿 児 島	2
	福 井	3			

## 2 詞句について

ここに記録された「はないちもんめ」の詞句は多種多様で、一つとして同じものはない。しかしながら詞句の構成には法則性があり、分類が可能である。ここでは尾原昭夫氏の提案型<sup>13)</sup>をもとに、筆者が補訂した分類型により分類(表2)してみることにする。はじめに、氏の案とそれぞれを代表する詞句例を紹介しておこう。

### 尾原氏の分類5型

- (1)基本型……………ほぼ全国的に分布
- (2)ふるさと型…ほぼ全国的に分布
- (3)となりのおばさん型  
……………主として中部地方以東に分布
- (4)たんす長持型(物まね型)  
……………主として中部地方以西に分布
- (5)複合型……………主として中部地方に分布

#### (1)の例

勝ってうれしい 花いちもんめ  
負けてくやしい 花いちもんめ  
ちゃんとりたい 花いちもんめ  
ちゃんとりたい 花いちもんめ

#### (2)の例

ふるさともとめて 花いちもんめ  
ふるさともとめて 花いちもんめ  
もんめもんめ 花いちもんめ  
もんめもんめ 花いちもんめ  
さんもとめて 花いちもんめ  
さんもとめて 花いちもんめ

勝ってうれしき 花いちもんめ  
負けてくやしき 花いちもんめ

#### (3)の例

勝ってうれしい 花いちもんめ

12) 遊び方に視点を置いて「はないちもんめ」例を抽出すれば、多様な詞句を有する例が多く収集できるが、ここでは唱句の中に「はないちもんめ」を含むことを条件に抜き出した。

13) 尾原昭夫『日本のわらべうた 戸外遊戯歌編』社会思想社、1975年、p138。

負けてくやしい 花いちもんめ  
 となりのおばさん ちょいと来ておくれ  
 鬼がこわくて 行かない  
 おかまかぶって ちょいと来ておくれ  
 おかま底ぬけ 行かない  
 ふとんかぶって ちょいと来ておくれ  
 ふとんビリビリ 行かない  
 それはよかよか どの子がほしい  
 あの子がほしい  
 あの子じゃわからん  
 この子がほしい  
 この子じゃわからん  
 まるくなって 相談しよう  
 ちゃんがほしい  
 ちゃんがほしい  
 じゃんけんポイ(あいこでシヨ)

(4)の例

たんす長持 どの子がほしい  
 さんがほしい  
 どうして行くの  
 笑いもって おいで

‘はないちもんめ’の語句をもち、遊び方を同じくする「はないちもんめ」の最もシンプルな詞句例は、表2 中省略型としてあげた“ハナちゃん欲しいよ花一匁、マサちゃ

ん欲しいよ花一匁”である。これだけの言葉で遊びは成立し、展開もする。次に簡潔な表現は、基本型に該当する6例であり、それ以外は、おのおのの型の枠内で長々と問答の言葉が続く。また複合型(表3複合型内訳参照)のように、型の枠を越えて詞句を連結させている例も多い。口承で伝えられてきたにもかかわらず、長く複雑な唱句の方が多く残されていることに着目したい。また、詞句の転化は意味内容に沿って少しずつなされる面も見られるが、音韻の要素から行われ、意味的には飛躍する例も多々見受けられる。例えば故郷型の場合、基本系の基の語句は‘故郷求めて’と考えられるが、‘故郷たずねて’への変化は前者によるもので、‘故郷まとめて’への変化は後者によるものである。また、基本系から白砂糖・黒砂糖系への変化は、‘ふるさと’から‘しろさとう’へ、音は近似しつつ意味内容が飛躍するという一興を求めたものと思われる。この場合全く異なる意味へ転じてしまうため、基の詞句との関連が不明になりが

表2 「はないちもんめ」の詞句分類表

型・系	数	内 訳	詞 句 例
基本型	6	東1 西5	勝ってうれしい・負けてくやしい(5),うれしき・くやしき(1)
省略型	1	東1	ハナちゃん欲しいよ花一匁・マサちゃん欲しいよ花一匁
故郷型	基本系	13 東7 西6	故郷求めて(3),故郷まとめて(7),故郷たずねて(2)
	白砂糖・黒砂糖系	3 東3	黒砂糖求めて・白砂糖求めて,まるめて,かためて
	東京・大阪系	2 東1 西1	東京めがけて・大阪めがけて,東京まとめて・大阪まとめて
	はなちゃん・みよちゃん系	2 東1 西1	はなちゃんとまとめて花いちもんめ みよちゃんとまとめて(各1)
隣のおばさん型	24	東19 西5	隣のおばさん(22),向かいの誰かさん,ご新造さん(各1)
たんす長持型	11	東5 西6	たんす長持どなたがほしい(4)たんす長持ちどの子がほしい(7)
複合型	16	東8 西8	

表3 複合型内訳

型	先頭の型	連結されている型・詞句	例数
A	基本型 +	みかんが好きか・りんごが好きかの詞句	1
		子買お型	1
B	故郷型 +	隣のおばさん型	4
		たんす長持型	1
		子買お型	1
C	隣のおばさん型 +	花たばまとめて・鼻くそまるめての詞句	1
D	みかんきんかん東京へ送る +	隣のおばさん型	1
E	梅と桜を合わせてみれば +	たんす長持型	1
		基本型	2
F	欲しや欲しや +	基本型	1
G	花が咲く咲く花一匂・花が散る散る花一匂 +	梅にうぐいす + たんす長持型	1
H	桜桜弥生の空は +	故郷型 + 子買お子買お	1

ちだが、音韻をたどることにより証される一例である。

基本型として括られた例は、愛知、兵庫、長崎、鹿児島に点在していた。故郷型は、東西にバランスよく配されていた。しかしながら基本系としてあげた詞句例を子細に検討してみると、‘故郷求めて’は京都、大阪、香川の3県のみ集中していた。発祥地を示唆する根拠例とみてよいだろうか。隣のおばさん型は、尾原氏も指摘するように中部以東が圧倒していた。たんす長持型は、故郷型と同様東西に偏りなくあった。複合型も、全体としては東西同じ例数が記録されていたが、内訳を調べると、‘隣のおばさん’の詞句を連結させているものは東が圧倒し、‘梅と桜’を繋げたものは西にしかみられないなど地域的な特徴は明確にあった。記録された詞句のほとんどに、子どもの

固有名があげられていることに注目したい。遊びの局面で名前は刻々と入れ替わるのだから、記されている名はおそらく当時の象徴的な名前か、流行った名前であろう。そうした名前の一覧からも、時代の特定や遊ぶ子どもの特徴が伺えるのではと思い、集約を試みた。全体を通して一番多かったのは、‘みよ’（28例）である。次が‘はな’（24例）で、この二つが大勢を占めた。後は‘花子’（3例）、‘えみ’‘ゆり’‘しおり’‘ひびき’‘太郎’（各2例）、‘まさ’‘ちよ’‘みこ’‘あや’‘とめ’‘なお’‘きみ’‘みえ’‘ちこ’‘けいこ’‘みえこ’‘きょうこ’‘よっちゃん’‘みっちゃん’‘てっちゃん’‘たかちゃん’（各1）とあった。‘はなちゃん’ど‘みよちゃん’が女の子の名を代表していたのはいつであったろうか。少なくとも明治以前ではなく、大正か昭和以降であろう。また、女

子の名に混じって‘太郎’と‘てっちゃん’  
という男子の名が3例あった。この点から  
は、女子の遊びとして展開されていたらし  
いことが検証できる。

詞句と地域性という点から興味深い例を  
あげれば、静岡に“富士山またいで花いち  
もんめ”が、福岡に“人形さんが欲しい、人  
形さんじゃわからん”(博多人形か)という  
のがある。

### 3 旋律について

詞句に伴う旋律は、多様な姿で採譜され  
ていた。共通する詞句“勝ってうれしい花  
いちもんめ・負けてくやしい花いちもんめ”  
に焦点を当てて、そのメロディーの型につ  
いて種類分けを試みてみると、おおよそ次  
の3パターンに集約されることが分かった。  
その一は、現在普及をみている「はないち  
もんめ」のメロディーに最も近く音域の狭  
い(2度)東京型、その二は、関西系のアク  
セントに沿い音域が少し開く(4度)京都  
型、その三は、一番音域の広い(6度)青森  
型である。譜例(図1)を示す。

東京型に属するのは、東京、埼玉、群馬、  
茨城、愛知、岐阜、静岡、山梨、長野、新

#### a. 東京型旋律



#### b. 京都型旋律



#### c. 青森型旋律



図1 「はないちもんめ」の  
代表的な旋律3型の譜例

潟、福井、岡山の12地域で、京都型は、京  
都、大阪、兵庫、和歌山、三重、島根、徳  
島、香川、福岡、岩手、北海道の11地域、  
青森型は、青森、山形、福島、栃木、富山、  
奈良、愛媛、高知、大分、熊本、長崎、鹿  
児島の12地域であった。東京型は関東・中  
部地方に集中し、京都型は近畿を中心とし  
て主に西の地域に、青森型は東北と九州に  
多かった。3型に等分されるかたちで分別  
が成った。

詞句との関係でみれば、異なる詞句で  
あっても地域が同じ場合は、旋律は共通す  
るケースとそれぞれに独自の旋律が付いて  
いる場合とがあった。話し言葉のイント  
ネーションのように、地域地域に伝えられ  
た独自の音の抑揚が、他地域から運ばれ  
た唱句については、詞句のみ吸収して抑揚  
は廃棄してしまう場合と、詞句とメロ  
ディーが一体化したもものとして定着してゆ  
く場合とが認められたのである。

### 4 遊び方について

遊びの形状については、全員が二組に分  
かれ、それぞれ横隊になって手をつなぎ、  
数メートルほど離れて対面するという体型  
でスタートし、前進と後退を繰り返す。途  
中、各組相談するため円陣を作り、また元  
の体形にもどる。次に指名された子が中央  
に進み出て、勝負をし、負けた子は相手側  
にもらわれていくというものである。勝ち  
組・負け組の子の役柄はあるが、仲間から  
離れて存在する鬼はいない。

遊びに共通する要因としては、掛け合い、  
指名、交替が考えられる。遊びのルールと  
しては、‘指名’のみで交替する、‘指名’に  
加えて‘じゃんけん’、もしくは‘引っ張り  
合い’という勝負による交替の二者がある。

前者は9例であった。多数を占める後者のうち、じゃんけんによるものは37例、引っぱり合いによるものは5例、時々に応じて使い分けるものが22例であった。他に一例、中央に円を書き、片足ケンケンによる押し相撲で勝負するというものがあった。

遊びのおもしろさの要素としては、問答部分の会話のやりとり、勝負の場面、

もまれて行く際のジェスチャーの3つがあげられる。複合的に組み合わせられているものもあるが、要素ごとにみみると、

は32例にあった。は指名による交替の9例以外のすべてにあり、は10例にあった。ジェスチャーの具体例を紹介すれば、花嫁・ちょうちょ(各4例)、うさぎ・へび・馬・猿・豚・お婆さん・お馬に乗って(1人で)・お駕籠に乗って(送る子二人で手車を組み、送られる子がそれに乗って)各1例)とあった。

また、地域性あふれる例としては、船を曳くようにして引き合う(高知)というものがあった。

## 結 び

継承されてきた「はないちもんめ」の具体例を考察して、遊びのルーツがある程度明確になった。詞句の面で、また遊びルールの面で、それは江戸時代後期に記録されている「宿取り鬼」及び「子を買う子を買う」の二つを中心とし、他にも組み分け遊びである「梅か桜か」などいくつかを母体としていたようだ。ただし、今に直結する「はないちもんめ」としての成立は、近年おそらく大正時代頃に京都郊外でできた“ふるさともとめてはないちもんめ”というわらべう

た遊びの詞句の部分が、その語感の美しさや親しみやすさゆえに、東京に古くから伝えられていた子もらい系の遊び歌のメロディーに乗り移る方法で形づくられたと言えるのではないか。もちろんその背景には、仕草自体を楽しむ近世の和やかな遊びから、より活力ある心体の動きや勝敗を主軸とする近代の遊びへと変化していく道筋が見え隠れする。その勝負法も知恵比べ、技比べから強者弱者が同一地平で競うことのできるじゃんけんへと移行している。

遊びの継承の特徴としては、その本質・本性が因子として主体となるばかりではなく、いわば本筋でない余技の部分が存外好んで伝えられていることに、改めて思いを致す。また、共同体として、他地域からの文化を受け入れるその鉄則のようなものについても教示を受ける。

はじめに紹介した本田及び西村両氏の「はないちもんめ」論で提起された問題点との関係性については別の機会で検討しようと思うが、大人の世界の現実的な行為と子ども世界の非現実的な行為の間にあるものを見極めは、子どもから大人への成長という観点からも大切なことと思う。

西郷信綱氏にはじまる共同体の視点から民俗行為を探るという命題は、筆者にとっても、今後の遊び研究に対し重要な鍵を得た感がある。子どもたちの地域での共同体生活の崩壊は、遊ぶ仲間や伝承遊びを必然的に喪失せしめた。その再生の場や機会は、地域社会の再興へと向かうのか、もしくは幼稚園や保育所のような人為的社会集団へと向かうのか。はたまた全く違った視線から考えねばならないのだろうか。今後の課題としたい。